



笠松の偉人

シリーズ⑤

境川の洪水を防いだ「杉山 塵外 翁」

すぎ やま じん がい おう

笠松町桜町の境川の堤防上に、縦2m横1.5mほどの大きな石碑が建てられています。

杉山 塵外 翁は1829年(文政12年)に厚見郡領下村の中谷 利右衛門の三男として生まれました。名前は茂です。塵外というのは号です。笠松町本町の杉山 市右衛門の養子となり、杉山 塵外となりました。

塵外は人柄が真面目で、幼少より学問を好み、一生懸命学びました。塵外は副区長、郡書記、県会議長などを務め、後には村役場の戸長になりました。

その頃、笠松町の北を流れる境川は、大雨が降る度に泥水が堤防からあふれて、町に洪水を引き起こしました。塵外はそのことを大変心配し、立派な堤防を築いて水害をなくそうと考え、いろんな人に一生懸命頼んで回りました。県知事だった

小崎 利準氏が、塵外の熱心さに感心し、ついその願いをかなえさせました。出来上がった堤防の長さは1368mもありました。これ以後、今日まで笠松町を水害から守っています。町議会は石碑を建てて、塵外の行いや教えを後世に伝えようと計画しましたが、塵外は石碑を見ることなく病気で亡くなりました。71才でした。

「いつ来ても あかぬ眺めや 四季の里」塵外 参考文献「笠松町の漢詩漢文碑」

編者:宮崎 じゅん 発行:笠松町文化協会

詳しくは、町ホームページ(「モラルセンス一覧」)で検索<No.10>をご覧ください。



かきまつの民話「昔むかし」

まといの松太郎①

この話はな。
けんかと火事は江戸の花々と、火消しがはぶりを利かせていた頃の話じゃ。

笠松三郷には陣屋がおかれ、秋井組、轡組、鉄組の三組の火消しがあってのう。この三組は幕府所在であったから、かつこうや道具は江戸の火消しに似て、そりや若いものあこがれの的やった。

そんな中でも、秋井組の松太郎は町の若者や女たちの人気を集めとったんや。そりや、けんかもやるが命がけで火の中につきすすむもん、むりないわな。

その松太郎にも、つらい思い出があったんや。
八つ(天保四年正月、二十九日)の夜のことや。下新町清右衛門より出た火が笠松陣



屋を灰にしたんや。そして、その飛び火が上本町鐘楼にうつり、おりからの西風で、松太郎の家のあった木曾川堤までの民家二百軒をも焼きつきましたんやな。

この火事を若葉屋火事、高島屋火事と言つてな、町の人には誰も忘れとらへん。はだしで歩いていった松太郎も苦労しおったんやな。もう、このあたり一番のまとい持ちや。

安政六年十月二十二日の夜のこと。

松太郎が床に入ると、ジャンジャンと、半鐘の音を聞いたのと、

「これはただならぬこと。おっかあ、準備せよ。」と言つたのが同時であった。

つづく